

NPO法人 自立支援事業所 サンレジデンス

# SUN通信 第7号

2018. 6. 20 発行

NPO法人 自立支援事業所  
サンレジデンス

〒011-0023

札幌市北区北23条西5丁目

1-18 Dio23ビル3F

TEL 011-746-8889

FAX 011-299-3107

## 厳寒の真冬に起きた悲劇

平成30年1月31日未明、札幌市東区の生活困窮者支援住宅で起きた火災事故では、入居者11人の尊い命が失われてしまいました。私が以前勤めていた支援団体との関係で、顔見知りの方も犠牲者の中に含まれており、また現在も困窮者支援活動に携わる者としても、とても他人事とは思えない大惨事でした。

11人の方が亡くなったというのに、大変不謹慎かも知れませんが、第一報を聞いたと



火災現場 一瞬で火が燃え広がり・・・

き、最初に頭に浮かんできたことは「ついに起きてしまったか」というものでした。行き場を失った人を助けるべく活動を続ける民間の支援団体は、その多くがギリギリの採算で運営しています。それでも、今困っている人たちの居場所を確保するために、なるべく安く物件を借り上げたいと思うのはどこの支援団体も同じです。

サンレジデンスでは、提供する各

部屋にストーブが備え付けられているので、入居者にはポータブルストーブ等の暖房機器を持ち込むことは原則として禁じています。

しかし今回火災があった施設のように、残念ながらそうした設備が伴わない支援住宅も、数多く存在しているのは紛れもない事実です。今日に至るまで、「こんな老築化した建物で火が出たらひとたまりもないだろう」と思える施設を何度も見てきました。事故現場となったこの施設も、そのうちの一つでした。だけど冬の北海道、暖を取らないわけにはいきません。ストーブに限らず、生活するうえで火器は必ず使用します。

命を軽んじているわけでも、危険に目を背けているわけでもありません。どこの支援団体も、それぞれのやり方で精一杯の工夫をしながら運営していると思います。その中で再び生きていく場所を見つけた人がたくさんいるのも、これもまた事実です。でもやはり、このような事故が起こると、私は現状での限界を感じます。

## 本当に考えるべきことは

あつてはならない火災事故でしたが、皮肉なことに、困窮者支援問題に世の中の目が集まることにもなりました。有料老人ホームと自立支援施設の違い、無届けの無料・低額宿泊施設の問題、スプリンクラーの設置義務について等々、マスコミ報道では連日のように取り上げられました。中には、財政難の民間施設には、防火対策費用を国が責任を持って負担すべきだという声も上がっていました。

しかし私は、そんな報道を見ながら、少し違和感を覚えたのです。もちろん、事故の原因究明は必要でしょう。だけど結局、論点は「火災」「防火」に大きく傾いていきました。また、事故後しばらくすると、運営団体の責任どころか、困窮者支援を行う側に対して同情的な空気さえ生まれてきました。私が感じた違和感は、まさにここにあったのです。



備え付けのストーブ（SUN入居者宅）

日本という国は、やはり困窮者問題から逃げていると思います。これでは見て見ない振りと一緒に一緒です。全ての施設に防火強化を強ければ、経営上運営を断念する施設が続出し、行き場のない人たちが溢れかえるのは火を見るより明らかです。それが分かっているから、今は様子を見て、そっとしておこう……。天邪鬼かも知れませんが、そんなことを言われているような気さえしました。

活動を行う者として、こんなことを考えるのは矛盾しますが、困窮者支援団体など、必要としない社会が望ましいのは言うまでもありません。けど私たちのような団体が日本全国に存在しているのは何故でしょうか。需要と供給という言葉はあまり使いたくありませんが、それは自力では立ち上がることが出来ない、生きていけないという人たちが後を絶たないからに他なりません。ありきたりですが、根本的な問題は常にここなのです。

本来であれば教訓にしなければならない惨事も、やがて風化され、他人事の悲劇で終わってしまうのでしょうか。それではあまりにも悲しすぎます。

今はただ、いつかまたどこかで、こんな悲惨な出来事が起こらないことを祈るばかりです。亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。

## 国民参加型の支援

前述したとおり、今回の事故により、困窮者支援のあり方について世間の注目が集まることになりました。そんな中、自分も積極的に支援に参加したいと名乗り出てくださる



寄贈品の数々 本当にありがとうございます

方々もいます。千葉県在住の一般女性からは、このニュースを見た後、少しでも役立てて欲しいと、二度にわたって寄付・寄贈をして頂きました。

札幌市内の清掃会社からは、就労協力の申し出があり、すでに数名の入居者が働いています。また、北海道歌志内市役所からも、数々の物品の寄贈を頂いています。

そして、以前から定期的に寄付を続けてくださる方々もいます。あらためてサンレジデンス職員一同、心より感謝申し上げます。

貧富の格差に歯止めが掛からず、今後ますます、貧困に喘ぐ人の増加が予想されます。出生率が下がり続ける一方で、急増する独居老人問題。この国における年代の仕組みは、歪な逆ピラミッド型になり、やせ細った足でグラグラと不安定ながらも、なんとか必死に立っているような状態に思えます。困窮者支援においても、同じようなことが言えます。貧困のかたちが多様化する中、もうすでに、行政と民間団体だけの支援体制では支えきれない状況になっているのは、今回の火災事故を見ても歴然としています。この問題に対して、国民一人ひとりの意識が、もっと強く向いてくれることを願ってやみません。支援は誰にだって出来ます。寄付や物品の寄贈はもちろんですが、困っている人に出会った時、「こんな施設があるから相談してみたら」と、一言声を掛けてあげる事も、立派な支援活動だと思います。そんな小さな意識が集約される場所。それが私たちのような民間の支援団体であることが、最も理想的な形ではないでしょうか。

「もう、あっちには戻りたくない」

20年以上札幌でホームレスを続けている方の言葉です。「あっち」とは、現代の人間社

会のことを意味します。全ての人が幸せでいられる社会など、現実的にはありえないし、そんな大層なことを望んでいるわけでもありません。だけど、現在困窮に苦しんでいる人が、「復帰」ではなく「戻りたくない」と思ってしまう社会にだけはしてはいけない。私は強く、そう思うのです。

## 一度立ち止まって全体像を

サンレジデンスの事業開始から8年、NPO法人設立からは4期目に入っています。この間、およそ300名の方々の受け入れを行ってきました。人生のやり直しに成功した人がいれば、残念ながらそうではない人もいます。同じように私たちの活動内容も、精度が上がった部分があれば、マンネリ化しているところもあることは認めなければなりません。今回の火災事故をきっかけにするわけではありませんが、私は今一度、自分たちの足元を見つめ直そうと考えました。すると一つ、ある疑問が浮かんできたのです。

それは「志」というものでした。何を行うにしても志は必要です。志なきところには何も生まれません。NPO法人 サンレジデンスの活動は、(株)パートナーの社会貢献事業です。では社会貢献とはなにか、それは人それぞれ、いろんな考え方があると思いますが、私たちの目的を一言で言えば、躓いた人が再出発するための居場所作りです。そしてその人が地域社会に復帰した時、その人自身が社会に貢献していく、これこそが理想であり、私たちの志であるはずです。

しかし時間の経過と共に、ある種流れのようなものが出来上がっていくことも否めません。だから今こそ一歩引いた目線で全体像を見つめ直すことが必要です。業務をこなすことだけに気をとられて、相談者をまるでベルトコンベアーの上に乗せて動かすような対応になっていないか、個々の問題にしっかりと向き合っているか、サンレジデンスはあるべき姿の支援団体になっているか等、問題意識を高めるべき時期なのだと思います。そうでなければ、それはとても志のある行動とは言えないし、危険です。何故なら私たちが接しているのは、物ではなく人なのですから。

初夏に入り、北海道は今が一番過ごしやすい季節です。それとは裏腹に、住む場所がない、助けてくださいというSOSが一向に途絶えることはありません。

正直、今日は相談の問い合わせが来ませんようにと願うこともしばしばです。それでもそんな人たちのために、私たちは「志」のある集合体でありたいと思っています。